

Kappa Novels



お願——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編アクション小説 ^{さば}裁 ^{おれ}くのは俺だ 円 390

昭和44年12月5日 初版発行

昭和49年3月20日 30版発行

著者 ^{おお}大 ^{やぶ}薮 ^{はる}春 ^{ひこ}彦
東京都世田谷区松原3-3-18

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Haruhiko Oyabu 1969

(分)0-2-93(製)02173(出)2271 (0)

長編アクション小説

^{さば}裁くのは俺だ^{おれ}

^{おお}^{やお}^{はる}^{ひこ}
大藪春彦



カッパ・ノベルス

目次

不意討ち	秘密印刷所	罾 わな	理紗 りさ	待ち伏せ	人質	拷問 ごうもん	救援	取引き
------	-------	---------------------	----------------------	------	----	------------------------	----	-----

5 25 41 58 71 86 100 114 123

水陸両用車	侵入	分 エラ け前 エックス	F X 機	月 つき 子 こ	メモ	金庫	脱出	虚無に帰る
-------	----	--	-------	--	----	----	----	-------

137 147 160 171 181 192 202 213 224

本文のイラスト・大塚清六

不意討ち

1

深夜の国道二四六号を、一台のコルチナ・ロータスが時速百キロほどで、スムーズに厚木のほうに向かっていった。車窓から春の夜風が吹きこむ。

両サイドのグリーンのレーシング・ストライプは消され、全体が目立たぬ灰色に塗りがえられていたが、そのコルチナはレーシング・ヴァーシオンであった。

スタンダードの百五馬力のエンジンのかわりに、B・R・Mでチューンした一・六リッター百四十五馬力のやつをのせている。エランと共通の、オリジナルのDOHCエンジンは、高回転では意気地がなく、メタルが溶けるのを防ぐためにデイストリビューターに自動的なカット・アウト装置をつけて、六千五百回転以上回すことが

できないようになっていた。

しかし、レーシング・エンジンのほうは、ピストンやカムシャフトなどを変えてあるのは無論であるが、ベアリングも鉛青銅のイリジウム製のを使って、七千回転以上回しても耐えられるようにしてある。

レーシング・シートのかわりにつけたバケット・シートの運転席では、三十五、六の男が、黒い革を捲いた、ギア・レシオ十一・八のシャープなハンドルを握っていた。

名前は毒島徹夫。浅黒く整った顔はシャープであった。しかし、こうやって一人きりになっていると、すさんだ虚無的な翳を隠そうとはしていない。渋い黒褐色のフィンテックスの背広に包まれた体は、肩幅が異様なほど広い。胸も分厚かった。

車は鷲沼を過ぎ、道幅は広々としてきた。毒島は軽くアクセルを踏みこんで百二十キロにスピードを上げる。加速を重視して、デフの減速比を四・一対一と上げたタイプだから、アクセルを一杯に踏んでも百九十五キロほどしか出ないが、実用上は不便ではない。

午前二時ごろであった。車の数は少ない。毒島は厚木

市に本宅がある郵政大臣の川崎信夫のところに、刷りあ

がったばかりの見本刷りを届けに行くところであつた。

つい数カ月前、国務大臣をしていた江川と、凄絶な札束のばらまきあいをやったあげくに、保守党の総裁選挙に敗れた川崎は、運輸大臣をやめ、新党を結成して江川と戦おうとした。

首相となつた江川は、郵政大臣の椅子を川崎に与えて懐柔にかかつた。川崎は新党を結成するのだけは断念したようだが、江川に対する憎悪の念をますます燃えたとせ、江川を失脚させる策動に熱中している。

周知のように、保守党の派閥は、大きく分けて、官僚派と党人派がある。

官僚派の金の作り方は、法律や法令を改定してでも大企業に便宜を計ってやって、見返りに巨額の献金を受けるわけだが、党人派のほうの汚職は大っぴらだ。

川崎は、党人派の古老が次々に世を去つたのち、現在では一番の大物になっていた。あくなき権力欲と物欲に憑かれた川崎は、農林や建設などの金になる大臣のポストを自分が信用できる直属の子分以外にはゆずらず、その恩恵ですでに貯えた私財は百億をはるかに越すといわ

れている。

何しろ、自分の名義の家だけでも、愛知県と神奈川県と東京に三カ所ずつのほか、全国に十カ所あり、それぞれが時価三億はする。全国の高速度道路の予定地の要所要所を買い占めているのは勿論のこと、自分がやっている建設会社は道路工事を請け負わすという図々しさだ。

毒島は、その川崎に傭われている怪文書屋であつた。川崎派や反川崎派の代議士には、毒島が川崎のために働いていることを知っている者はかなりいたが、それは毒島を情報屋として知っているだけで、怪文書の発行者だということを知っているわけではなかつた。毒島の本当の商売を知っているのは、川崎とその末弟の光一だけだ。

怪文書とは、言うまでもなく、敵をおとしいれるために、敵にとって不利なことを、もっともらしく書きたてた文書だ。政治家を攻撃するときには、無論、汚職を扱う。怪文書の性質からして、架空の名義で、架空の住所から、関係者やマスコミなどに郵送する。

もっともらしい、とは言つたが、ある程度は真実のことを書く。しかし、これまでの場合、川崎は毒島に一番

肝心なことの証拠は書かさずに、怪文書を読んだマスコミや進歩党などが騒ぎだすのを待って、官僚派の敵との取引きをはじめるのが常であった。

しかし、今度はちがう。いま毒島の内ポケットにはいつている見本刷りには、江川首相や山村新幹事長の命取りになるかも知れない汚職事件の内容が、証拠書類のコピーまでつけてストレートに書かれている。川崎は証拠書類を買収するのに、億を越す金を使っていた。

事件というのは、現首相が国務大臣時代に、総裁選挙の軍資金三十億を捻出するため、軽井沢に住む元老——それがまた川崎の宿敵であった——の示唆を受け、当時は大蔵大臣をしていた山村を使って、国有地の払いさげで荒稼ぎをやったことだ。

問題の土地は、都下調布に八万坪近くを占める旧陸軍兵器補給廠跡であった。それが、山村建設のトンネル会社の一つに坪五百円の割りで払いさげられ、別のトンネル会社の幾つにも名義が転々としたあと、坪五万円で関東重工に売られたのだ。

そのあたりの土地は坪十万近いから、関東重工は安い買い物をした、と言われたが、原価が五百円と知ったら

国民は仰天するに違いない。無論、全体の差額約四十億は、山村の手数料を引いて、江川に渡ったのだ。

それだけでなく、関東重工からは、坪につき約二万円、全体で十五億のリベートが江川に渡った。その土地で、関東重工は、防衛庁から発注があったミサイルを生産する。

総評価額——時価はその何倍もする——三兆七千億円といわれる国有財産は、大きく分けて、行政財産と普通財産がある。

行政財産には、官庁などの建物や敷地等の公用財産や、公園などの公共財産、それに皇室用財産や国有林野などの企業用財産がある。

普通財産には、払いさげや貸付けできる、いわゆる処分対象財産がある。行政財産を管理しているのは大蔵省国有財産局の第一課、普通財産を扱っているのが第二課と第三課で、その局の下に各地方の財務局があるわけだが、国有財産の管理処分についての権限は、最終的には大蔵大臣にある。

だから、大蔵大臣であった山村のハンコ一つで、国有地の払いさげはどうにでもできたわけだ。江川の手足と

なつて働いた山村は、見返りとして、江川が保守党の総裁に三選されたあとは、自分が総裁の地位をゆずり受けることの約束を、江川や軽井沢の元老からとりつけていた。検察庁が動きだしたら、指揮権を発動することになっている。

毒島の内ポケットにはいつている文書の見本刷りには、それらの真相が印刷されている。こうやって車を走らせている間にも、毒島の秘密印刷所では小型印刷機が唸りをあげ、二人の助手が刷りあがった文書を綴じて、封筒に宛名書きをしている……。

毒島はフイリツプ・モリスをくわえ、純銀のデュポンのライターの火を移した。

ライターをポケットにしまい、何気なくバック・ミラーを覗いた毒島は、反射的にシフト・レヴァーに手をかけた。

ライトを消した一台の車が、コルチナ・ロータスに追突しそうに迫ってきていた。幅広い車体からアメ車とわかる。フォード・ムスタングらしい。

毒島はタバコをくわえたまま、唇を歪めて笑った。ギアをサイドに叩きこむと、アクセルを一杯に踏みこむ。

二基のダブル・チョーク・ウェーバー・キャブが唸りをあげて夜気を吸いこみ、排気管は腹にひびく轟音をあげた。タコとスピードのメーターの針がはね上がり、毒島の背はシートに押しつけられる。

しかし、バック・ミラーを覗いている毒島から冷笑が消えた。普通のムスタングなら、たちまち引き離されるところだが、二車の間隔はつまりこそすれ、離れはしなかった。

相手は、シエルビー・ムスタングGT三五〇らしい。サイドで百七十まで引っぱった毒島は、トップにギア・チェンジすると共に、鋭くハンドルを切って、センター・ライン寄りの第一車線に車を移した。

ローリングは大きく、内側の前輪は地面から離れたが、後輪は路面にへばりついて、しっかりとグリップを続けた。

GT三五〇も車線を移した。タイヤが悲鳴をあげながら白煙を吹く。毒島は今度は左の端の車線に移る。スピードはもう百九十近い。

それを追ってきたGT三五〇が激しいスピンを起こすのが見えた。車内には二人の男が乗り、トランク室から、

無線用らしい長いアンテナを突き立てている。

右側の上り車線までスピニングしながら跳びだしたGT三五〇は、やっと車首を立て直すと、ライトをつけて追ってきた。

毒島はスピードをゆるめなかった。道の両側が切り通しになっていて、左右に脇道は無い。そして、ライトの光の先に、道幅一杯にひろがったトラックの群れが浮きあがった。トラックも無灯火だ。

2

タバコを吐き捨てた毒島は、急ブレーキを踏みながら、ヒール・アンド・トゥでギアを落としていったが、下り車線のトラックの群れがバック・ライトをつけて一斉に毒島の車に押し寄せてくるのを見て、食いしばった歯の隙間から呻き声を漏らした。上り車線にひろがったトラックは、ライトをアップにし、バックする下り車線のトラックとスピードを合わせて前進してきた。

このままではブレーキが間にあわなかった。毒島は、ブレーキを踏んだまま、鋭くハンドルを振った。

コルチナ・ロータスは、計算通りに激しいスピンを起こした。どうせトラックとぶつかるなら、後ろか横腹からぶつかったほうが助かる確率が多い。

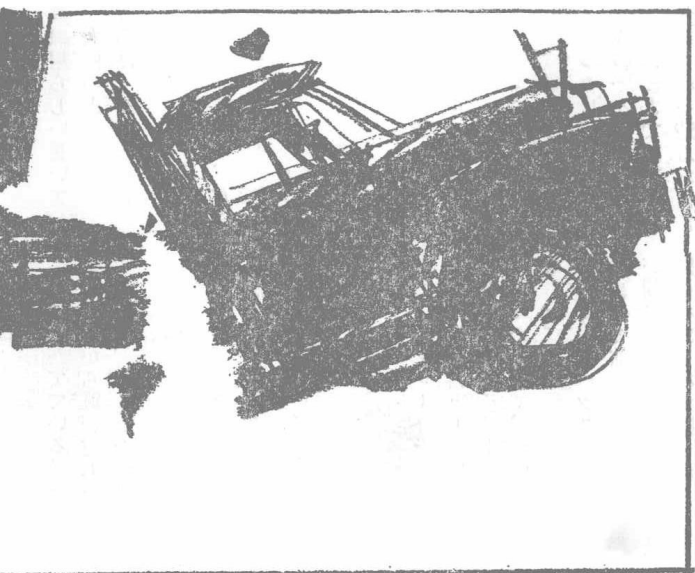
轟音を発して、毒島の車は、尻からトラックの一台に激突した。トランクがバラバラに千切れて吹っとぶ。ドアが開いた。

毒島の頭は、慣性でうしろに反り、ヘッド・レストを大きく歪めた。意識が朦朧としながら、毒島は火災を防ぐためにエンジン・スウィッチを切った。

続いて毒島は、脱出のために安全ベルトを外そうとした。かすみかけた毒島の瞳は、上り車線のトラックの一台がセンター・ラインを越えて下り車線にはいりこみ、一度急停止してから、今度はバックで毒島の車に体当たりしてくるのを見た。

安全ベルトを外した毒島が開いたドアから路上に転がり出ると、毒島の車がサンドウィッチにされてグシャグシャになるのが、ほとんど同時であった。

アスファルトに頭をぶつけた毒島の目の先が真っ白になり、続いて真っ暗となった。気絶したその毒島の脇で、コルチナ・ロータスの残骸が燃えはじめる。流れた



ガソリンが、炎と共に毒島のほうにのびてきた……。

誰かが苦しげに呻いている。その呻き声で毒島は意識を取り戻した。呻き声は、毒島のものであった。

目を開こうとしたが臉は動かなかった。頭のなかに電気ドリルを刺しこまれているようだ。肺炎にかかったように息苦しかった。

肩口を何かでひっぱたかれたようだが、体の芯からひろがっている苦痛のために、打撃の痛みなど大して感じなかった。

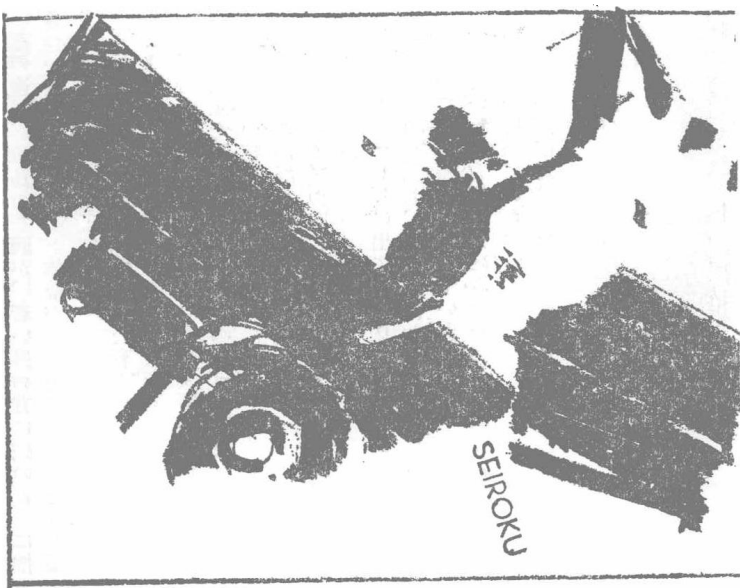
しかし、その打撃が刺激になって、毒島の意識ははっきりしはじめた。

「目を開け！」

と、命令する声が聞こえる。

ここは、どこだ？……そうか、車から跳びだしたさき意識を失ってしまったのか。そうすると、俺はまだ死んではないらしい……毒島はやっとのことで目を開いた。瞳の焦点がさだまってくる。

地下室のようであった。毒島は荒いコンクリートの床から天井にのびた直径五センチほどの鉄のパイプに、右



手首を手錠でつながれていた。そして、汚れたマットの上に横向きに転がっている。

「起きろ！」

残忍な顔をした若い男が、バケツの水を毒島の顔に浴びせた。

身震いしながら、毒島は顔を流れる水をなめた。唇も舌も腫れあがっているのが自分でわかる。肺も火ぶくれした感じだ。

「さあ、立つんだ」

若い男は命じた。

毒島は動かなかった。下着だけの姿にされていることに気付く。血まみれだ。

「野郎、甘ったれやがって」

男は空になったバケツを放りだすと、毒島の体に手をかけた。

「畜生、重てえ野郎だ」

と、罵りながら、毒島の体を起こしにかかる。

パイプに掛けられているほうの右手の手錠の一端がパイプを捲いたまま上に移動し、毒島は上半身を抱き起こされた。

その途端、毒島の左腕が、若い男の首に蛇のように捲きついた。毒島は弱った体ながら、力のありったけを振り絞る。

男は暴れたが、喉の軟骨が嫌な音をたてて潰れた。そのとき毒島は、後頭部から体の芯に走った打撃の苦痛を受けて再び意識を失う。背後に別の人間がいたのだ。

再び意識を取り戻したとき、毒島は左手首も別の手錠で鉄パイプの柱に縛りつけられていた。パイプの柱に抱きつくような格好をさせられている。

そして、パイプの向こう側にベンチが置かれ、三人の男が並んでいた。

三人とも、テレビに出てくるウルトラマンのような面をかぶって顔を隠し、裁判官のようにゆるやかなガウンをまとって体の特徴を隠していた。真ん中の男は手袋までつけている。右側の男はムチを持ち、左側の男はガス・バーナーを持っていた。

「しぶとい野郎だ。だけど、もう暴れることはできまい」

右側の男がお面の陰から冷笑した。

「貴様たちは誰だ？」

毒島は呻くように言った。

「貴様を知る必要は無い。知ったら、死ななければならなくなる。さあ、しゃべれ、貴様の秘密印刷所はどこなんだ？ 勿論、怪文書のな」

右側の男が言った。毒島にとって、どこかで聞いた覚えのある声だ。真ん中の大柄な男は沈黙を続けていた。

「知るもんか」

「とぼけるな。貴様の上着の内ポケットにあった見本刷りのことは、どうやって説明する？」

左側の男が空中で鋭くムチを鳴らした。

「何のことだかわからん」

「忘れたって言うのか？ 思いださせてやる」

男はムチを毒島の頬に叩きつけた。

毒島の口の内側が切れ、甘酸っぱい血が口のなかにたまってきた。毒島は、それを唾と共に、男の顔に向けて吐きつけた。

勢いがたりずに、血と唾は、男の胸に当たって毒々しくひろがった。男は再びムチを振りあげる。

毒島は、しゃべったら消されることぐらいのことは知っていた。何としてでも脱出しないことには確実に死が

待っているだろう。

それだけでない。毒島は二千万の約束で、今度の仕事を請け負ったのだ。前金はまだ五百万しかもらっていない。残金を川崎から取りたてないうちには、くたばるわけにいかない。

「殺してやる！」

男は再びムチを振りおろそうとした。

「俺が死んだら、どうなると思う？——」

毒島は吐きだすように言った。

「俺が明後日までに連絡をとらなかったら、俺の部下は、刷りあがった文書を発送することになっているんだ」

「と、いうことは、貴様が怪文書屋だということを認めたということだな。ますます、拷問のしがいがでてきたぜ」

男は低く笑った。

「貴様たちを傭ったのは江川だな？」

「それがどうした？ 検察も警察も俺たちの味方だ。貴様一人がじたばたしたところでどうにもなりはしねえ」

「川崎先生だって、検察や警察の首脳部を握っている。

江川派以上にな」

毒島は言った。

三人の男は、仮面の下で声も無く笑ったようであった。

「可哀そうに……貴様が知らないのは無理もない。だいぶ長いあいだオネンネしていたからな。川崎は危篤だ。助からん」

バーナーを持った男が冷たく言った。

3

毒島は、いきなり横っ面を張られたときのような表情になった。

「危篤？ 貴様たちが手にかけてたのか？」

「誰でもいいだろう。腹の動脈が破れた。俺たちは、奴が脳溢血を起こすものとはかり思ってたが、奴は腹に動脈瘤があったんだ。そいつが、血圧を下げる漢方の妙薬というふれこみで飲ました強力な血圧上昇剤で破れた。もう川崎の命は長くはない。あと一日か二日だろう、よく保って」

「畜生……」

「さあ、わかったらう。しゃべるんだ。貴様一人がどう頭張ったって、どうしようもないぜ」

男はムチを横なぐりにした。

避けることができずに、毒島は左耳の上にその打撃を受けて、背を弓なりに反らせた。それから、ガツクリと頭を垂れて三度目の気絶をしたふりをよそおった。凄まじい耳鳴りをこらえて、神経を右耳に集中する。

「どうしましょう先生、また気絶しやがったよう……」

男たちの一人が、真ん中にいた男に尋ねたようだ。

「バーナーを使え。じわじわとだ。殺してしまつては、面倒なことになる。殺すのは、奴が口を割つてからだ」

真ん中にいた男が、噎れた声で言った。

その声を聞いたとき、毒島は危うく気絶している擬態を忘れるところであった。

何度も聞いた覚えのある声だ。保守陣営からは右翼の最高峰とか国士と呼ばれ、反体制陣営からは天下国家を食いものにする政商と呼ばれる、政界の黒幕の桜田信猛の声だ。

そんなはずは無い……混乱した頭のなかで毒島は考えた。桜田は、川崎と義兄弟の契りを結んでいたはずだ。

もっとも、金と権力のためなら人を殺すことも平気な桜田のことだから、江川派に寝返りを打ったとしてもおかしくはないが……。

そういえば、今度の仕事を命じられたとき、川崎は毒島に言ったことがあった。調布の旧陸軍兵器補給廠跡の払い下げについては、桜田が途中で嗅ぎつけて山村から数億を嚇し取っているが、怪文書のなかではそのことに触れないように……と。したがって、桜田の恐喝の事実には文書では触れないとはいへ、文書の出所が川崎からのものだということを桜田に知らせてはならない……と。

バーナーに点火される、小さな銃声のような爆発音がした。続いてシュー、シューという無気味な炎の音がする。

「貸してみろ。儂がやってみる。昔、儂は南方で、拷問の名人と言われたもんだ。炙り殺してやった土人や毛唐は、何十人、いや何百人になるかな。勿論、口を割らしてからだが……久しぶりに血が騒ぐぜ」

桜田は血に飢えたような声で言った。

毒島に近づき、その左右の手首を手錠でつないだ鉄パイプに向けて、バーナーの炎を浴びせる。

熱がパイプから手錠に伝わり、手首を焦がす熱がなかなかのことでは冷えないようにと狙っているのである。

そのとき突如として顔をあげた毒島は、右足に全身の力をこめて蹴りあげた。サツカーと拳法で鍛えた毒島の蹴りには、不自由な姿勢から放ったという大きなハンデイがあるとはいえ強烈であった。

胃の近くに蹴りをくらった桜田は、マグナム・ライフで射たれたように、うしろに吹っ飛んだ。バーナーを放りだしている。

桜田はベンチにぶつかり、派手にぶっ倒れる。コンクリートの床にキスした拍子にプラスチックの仮面が外れ、隠されていた顔が、鈍い電灯の光に照らされた。

やはり桜田であった。灰色の髪を壮士風に肩の近くまで垂らし、やはり灰色の太い眉の奥に、催眠術師のような瞳が炯々と光っている。

いや、炯々と光っているはずと言ったほうが正確だ。

今はその瞳は苦痛に歪み、四つん這いになって、床に胃の内容物を吐きちらしている。もし毒島が自由な姿勢から蹴ったのなら、桜田の胃は炸裂していたはずだ。

茫然としていた二人の男の一人が、あわてて桜田を抱き起こそうとした。もう一人が、床の上でノズルから炎を吹いているバーナーを拾いあげて消火した。

吐き終えた桜田は、仮面をつけずに、よろめきながらベンチに腰をおろす。苦しげに二人の部下に顎をしゃくると、二人とも仮面を外す。二人とも毒島には見覚えがあった。桜田が顧問をしている大東亜会の大幹部の岡崎と吉沢だ。

「やっぱし、あんただったのか。寝返ったな。顔を見られたからには、俺を殺す、と言いたいんだろう」

毒島は唇を歪めた。背中も胸も脂汗でびっしょりだ。

しかし、心の隅では、殺されたところで、生まれてきた土に還るだけだ、という捨て鉢な気持ちがある。その捨て鉢なふてぶてしさで、毒島はこれまで数かぎりない危機を乗り越えてきた。

痛む腹をさすりながら、桜田は荒い息を鎮めていた。そのうちに、瞳に禿鷹のような光が甦ってくる。